

令和5年度さとうきび・甘蔗糖関係 検討会の概要

鹿児島事務所、那覇事務所

当機構は、鹿児島県の南西諸島および沖縄県における重要な基幹作物である、サトウキビの生産に関するさまざまな課題を両県の関係者が一丸となって解決していくことを目的として、「さとうきび・甘蔗糖関係検討会」（以下「検討会」という）を開催している。

令和元年度の石垣島における開催以来、4年ぶりとなる今回は、令和5年10月25日、鹿児島県鹿児島市のかごしま県民交流センターにおいて、「持続可能なサトウキビ生産の実現に向けて」をテーマに開催した（写真1、2）。検討会には、鹿児島県および沖縄県を中心に、生産者、生産者団体、製糖企業、行政、研究機関、農機具メーカーなど、総勢167人が参加した。概要は、以下の通り。

1 砂糖をめぐる現状と課題

農林水産省農産局地域作物課課長補佐の梅島悠氏より「砂糖をめぐる現状と課題について」をテーマに、砂糖およびサトウキビの生産動向などについて説明があった。

2 基調講演

東京大学未来ビジョン研究センターの小原聡特任准教授が、「地域産業×科学技術によるサトウキビ産業の変革の可能性」と題し、基調講演を行った。先進技術を活用し「経済成長」と「環境保護」の両立に向けて社会システム全体を変革させる成長戦略「グリーントランスフォーメーション（GX）」のサトウキビ産業への導入に関して、種子島での取り組



写真1 基調講演の様子



写真2 テーマに関する取り組み報告の様子

み事例などを踏まえて、現状の課題および今後の展望について講演した。講演の最後は、「農業の担い手不足、戦争や頻発する気象災害による、原料調達
の質的・量的な不安定さなどのすでに顕在化している課題を克服し、さらにカーボンニュートラル達成のような新たな社会的要請に応えながら、サトウキビ産業が持続的に発展していくためには、従来技術の延長ではなく、将来のあるべき姿からバックキャストして、各地域に適した新たなGX技術・システムを開発・導入していくことが重要」と締めくくった。

3 テーマに関する取り組み報告

本検討会のテーマである「持続可能なサトウキビ生産の実現に向けて」に関して、両県の行政、製糖事業者および生産者が取り組み事例の発表を行った(表1)。質疑応答後、オブザーバーの東京大学未来ビジョン研究センターの小原聡特任准教授が「農工融合を目指し、生産者と製糖事業者が歩み寄って生産量を増やす取り組みが必要ではないか」と感想を述べた。

表1 テーマに関する取り組み報告の発表者と発表概要

分野	発表者			タイトル・概要
行政	鹿児島県	鹿児島県農政部農産園芸課糖業特産作物係長	牟田 杉乃	鹿児島県におけるさとうきびを巡る現状と課題 鹿児島県におけるさとうきびの生産の動向、単収・品質向上、栽培面積の維持・拡大など課題の解決に向けた取り組みについて説明。
	沖縄県	沖縄県農業研究センター作物班 班長	内藤 孝	沖縄県におけるさとうきび増産の取り組みについて 沖縄県におけるさとうきびの生産の動向、さとうきびの増産に向けた、連続株出し多収品種を用いた次世代型機械化一貫栽培技術開発の取り組みについて説明。
製糖事業者	鹿児島県	南栄糖業株式会社取締役業務部長	小城 桂介	沖永良部島のさとうきび危機からの回復そして現在の危機 平成以降、さとうきび生産が低迷した時期から、直近の栽培面積・生産量の増大に至る経緯について、沖永良部島の関係者一丸となった取り組みを報告。
	沖縄県	北大東製糖株式会社取締役事業所長	金城 武俊	製糖期における労働力確保の取り組みについて 季節工の確保に頭を悩ませる製糖工場が多い中、リクルート用動画の作成、WEB・SNS広告の積極的な活用および外国人労働者採用による人材確保の取り組みなどを報告。
生産者	鹿児島県	知名町(沖永良部島)	園田 孝徳	機械化一貫生産体系による経営拡大と地域のさとうきび生産基盤の維持 機械一貫生産体系を確立し、作業受託サービスを積極的に展開し、地域の生産基盤を維持する取り組みについて報告。高齢者から圃場を借り受け、新植、収穫および株出し管理作業後に畑を返還する株出しサービスなどを行っている。
	沖縄県	糸満市(沖縄本島)	島袋 幸光	目指せ！春植え単収10トン～単収アップの肥培管理～ 第47回沖縄県さとうきび競作会(4/5年)農家の部において、受賞圃場(春植え)で単収13.3トンを達成し、第1位を受賞。徹底した肥培管理で単収を向上させる栽培技術について報告。

4 研究成果発表

3人の研究者から、サトウキビ圃場における有機資源の効率的な土壌還元技術の開発、黒穂病抵抗性

品種の開発、ビレットプランタ植え付け（ハーベスタ採苗）に適する育苗生産技術の確立について、研究成果発表が行われた（表2）。

表2 研究成果発表の発表者と発表概要

発表者		タイトル・概要
国立研究開発法人国際農林水産業研究センター 熱帯・島嶼研究拠点 主任研究員	寺島 義文	サトウキビの持続的生産技術の開発に向けた製糖副産物・堆肥連用農家圃場の土壌調査およびバガス炭化物の利用可能性の評価 サトウキビ圃場における有機資源（フィルターケーキ、バガス灰、牛ふん堆肥）の効果的な土壌還元技術の開発に向けて、①製糖副産物や牛ふん堆肥を施用している農家圃場の土壌理化学性、土壌物理性の評価②製糖副産物や牛ふん堆肥、バガス炭を施用して、施肥を30%削減した場合の夏植えサトウキビの生育に与える影響の評価を行った。
国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構九州沖縄農業研究センター種子島研究拠点研究員	梅田 周	高度な黒穂病抵抗性を持つサトウキビ野生種を用いた品種育成 重要病害であるサトウキビ黒穂病抵抗性品種の開発に関して、国内野生種「西表8」に由来する黒穂病抵抗性DNAマーカーの開発、DNAマーカー選抜した黒穂病抵抗性育種素材について地域適応性（株出し多収性、早期高糖性、干ばつ耐性など）を評価し、品種化を目指す。
鹿児島県農業開発総合センター徳之島支場 作物研究室長	餅田 利之	ビレットプランタ植え付けを前提とした種苗専用生産技術の開発 労働力不足が深刻化する中、採苗・植え付け作業の省力化のために、ビレットプランタの普及が進んでいる。一方、ビレットプランタ植え付け（ハーベスタ採苗）に適する種苗生産技術が確立されていないため、ハーベスタ採苗を前提として、植え付け時期（栽培期間）が苗量、苗質などに及ぼす影響を試験。春植えについては、比較的栽培期間の長い苗がハーベスタ採苗に適するとの結果を得た。

5 持続的なサトウキビ生産に資する取り組み事例発表

株式会社BAGASSE UPCYCLE（バガスアップサイクル）の萩田なるみ事業推進リーダーから、「守りたい風景を次の世代へ繋いでいく」と題し、副産物であるバガスを利用したかりゆしウェアのシェアリングサービスの取り組みについて報告が行われた。

6 メキシコの砂糖産業

当機構調査情報部の峯岸啓之より「メキシコの砂糖産業」と題し、メキシコの砂糖需給、サトウキビ生産状況などについて報告を行った。

最後に、本検討会の開催に当たってご協力いただいた鹿児島県、沖縄県のサトウキビおよび甘蔗糖の生産に携わる関係者の皆さまにこの場を借りて、改めて御礼申し上げます。